

〔74〕東京シティ・バレエ団『カルメン』

変貌する現代のファンム・ファタル

2006年2月18日 東京新聞 夕刊

カルメンほど有名はヒロインはいない。近づく男を皆とりこにするのに、誰のものにもならない女。「カルメンは自由に生まれ、自由に死ぬんだ」と叫んで、ホセの熱愛の刃に倒れ込む姿は、男女を問わず見る者の心を激しく揺さぶらずにはおかない。

しかし考えて見ると、カルメンという女性には不可解な部分が多い。ほんとうは誰を愛していたのか？ 彼女の言う自由とは何への志向なのか？ もしくは何からの逃走なのか？ 彼女につきまとう運命とは？

そうした謎に目を向けると、カルメンという女性自体が暗く底の知れない渦に見えてくるのだが（そしてたぶん、その渦が小説の魅かなのだが）、数々の劇的な場面が放つインパクトゆえに、カルメンほど舞台芸術にふさわしい題材もまた珍しい。

舞踊では「カルメン」は特権的なテーマだった。ヒロインが踊り上手なロマの女というだけでなく、ビゼーの音楽が優れて喚起力があるからだ。しかも舞踊には言葉がないから

〔74〕東京シティ・バレエ団 『カルメン』

変貌する現代のファンム・ファタル

2006年2月18日 東京新聞 夕刊

解釈に幅が出る。これまで幾つものバレエ「カルメン」が作られたが、その演出次第で人物たちの輪郭は人種的にもジェンダー的にもさまざまなニュアンスを帯びた。

たとえばローラン・プティの振付による『カルメン』は初演が古く一九四九年だが、妻のジジ・ジャンメールがカルメンを、プティ自身ホセを鮮烈に踊り、異例の四ヶ月ロングランを記録した。以来、主として男性主役がスター性を発揮する作品となっている。当時としては斬新な振付で、エスプリの利いた洗練された演出ではあるが、しかし「ハバネラ」の曲でホセが見得を切るのも妙と言えば妙な話。物語の解釈という点では底が浅く、「原作への冒涇」と批判されたのももっともと言わざるをえない。

その十八年後に初演されたアルベルト・アロンソ振付の『カルメン組曲』（一九六四年）はプティのアンチ・テーゼのような作品で、カルメンを初演したマヤ・プリセツカヤの魅力が核になっている。ホセは朴訥な衛兵らし

〔74〕東京シティ・バレエ団『カルメン』

変貌する現代のファンム・ファタル

2006年2月18日 東京新聞 夕刊

く内面の苦悩を表現し、主要人物の周囲を「牛ノ運命」という役どころの黒衣の女性ダンサーが跳ね回る。ソ連で初演されたこともあって、口封じされた体制批判と出口のない恋が重なり合っって見える作品だ。

アントニオ・ガデスによる振付（一九八三年）はさすがスペイン舞踊だけあって、ロマの世界の濃厚な情感を発散している。ただしがデス自身が踊るホセはヒロイン以上に激情的。これまた男性が踊る「カルメン」だった。

二十一世紀になると、バレエのカルメンはさらにラディカルな変貌を遂げる。男性版『白鳥の湖』で大旋風を巻き起こしたマシユ・ボーンが思いついたのは、主役の男女を入れ替え、カルメンという名を英語読みにした『ザ・カー・マン』（二〇〇一年初演、〇二年来日）。性的魅力にあふれた自動車の修理工が、周囲の女性ばかりか同性愛の同僚までモノにしたあげく、犯した殺人の罪を彼に着せる。そしてヒーローは、愛を裏切られた若者の恨みの銃弾に倒れるのだ。現代の性風俗を背景にし

〔74〕東京シティ・バレエ団『カルメン』

変貌する現代のファンム・ファタル

2006年2月18日 東京新聞 夕刊

たこの『ザ・カー・マン』は、日本での評判はぱっとしなかったが、原作に描かれた人種や道義感の断絶を同性愛に仮託して浮上させ、ふしぎな説得力を持っていた。というのも、カルメンとホセは倫理観や結婚観を異にする国際結婚の悲劇と見ることができるからだ。

昨年三月に新国立劇場で初演された石井潤振付の『カルメン』は、ストーリーの解釈では最も原作に近い作品である。印象的なのはカルメンとホセが二人ながらに苦しむ愛の不毛。現代は愛を標榜するが、人はもはや愛に希望を見ることができなくなっているのだ。

そして今年の一月、もう一つ意表を突くバレエが登場した。東京シティ・バレエ団が初演した『カルメン』（石井清子、中島伸欣演出振付）は、東京のオフィス街を舞台に、会社のコンピューターから個人情報盗んでブローカーに売るキャリアウーマンが主役である。ガードマンのホセは束の間の愛に盲目となつて、あげく職を失うが、結局は裏切られ、嫉妬から彼女を殺そうとする。しかし駆けつけ

〔74〕東京シティ・バレエ団『カルメン』

変貌する現代のファンム・ファタル

2006年2月18日 東京新聞 夕刊

た警察の流れ弾に当たって倒れるのだ。それを冷たく見下ろし、背中に空しさを滲ませつつも毅然と歩み去るカルメンには、たしかに現代女性の一面がうかがえた。

真紅のパンツスーツに身を固めたカルメンは、今の東京の野望と非情の象徴だと言っていい。同様に、闘牛士の歌で華々しくコンピューター技師が登場した時も、意外性から客席に笑いが起こったがすぐに静まり返った。

現実の世相を痛感したからだろう。

愛にすぎる男の弱さと、愛にかまっている余裕のない女の疲れと苛立ち。それは一見逆説的に見えるのだが、しかし原作を読み返せば、ヒロインの絶望はまさにそれであったと思えば、思い当たるふしもなくはない。

今後もカルメンは変貌し、時代に合った新しい顔と心情を見せてくれることだろう。